

## 女子大學設立趣意書

夫れ國運の發展は國民の開發に由らざるべからず。國民とは、豈に獨り男子のみを謂はんや、亦た女子を併せて之を謂ふべし。女子は、其の性を異にするが爲に、男子と其職分を異にするのみ。大凡そ國民の開發と言はば、男女俱にすべきは言を待たず、而かして開發は固より教育に須たざるべからず。熟ら現今教育の設備を觀るに、男子に厚くして女子に薄きことなき耶。

世或は歐米女子教育の弊實を指摘し、我國の女子教育を危うめり、さりながら歐米の女子に於ける非點は、教育其の事にあらずして、教育の方法に歸するを知らざるべからず。蓋し我國教育の淵源は實に國體の精華に發す。祖先と子孫の連鎖を維持するを努め、重きを家に置き、是を以て家を齊ふるは、女子教育の鍵たり。近頃歐米亦た覺醒する所あり。頻りに齊家教育に向て意を傾けつゝあり。

今洛陽の舊都に女子大學を創立し、家政及び國漢文、歴史、外國語等の數科を設くる所以、教育設備の女子に薄くせざるの意を擴充し、勉めて常識の發達、趣味の養成、徳性の涵養を圖り、女子の職分を盡さしめて、國體の精華を發揮せんと欲するに在り、以て穩健着實の婦人を出すべく、以て虚榮憧憬の風潮を斥くべきなり。

是れ我が婦人會總裁として、心を盡くし玉へる、故光顏院殿が親しく切に見んことを欲し、而かも芳志を齎らして、逝き玉ひし處、今日之を實現するは、獨り國運の發展に貢獻するのみならず、亦た御遺志を成す所以なり。

明治四十五年三月

佛教婦人會聯合本部